

一九二〇年代のクローチェとファシズム

中 川 政 樹

〔キーワード クローチェ・ムッソリーニ・自由主義・ファシズム・イタリア〕

はじめに

一八九〇年代から第一次大戦にかけての期間に、ベネデット・クローチェ (Benedetto Croce, 1866-1952) は、「精神哲学」を体系化し、いわゆる「精神哲学四部作」によってイタリア思想界に並ぶものなき名声を確立した⁽¹⁾。この時期に、彼が主導したイタリアにおける知的・道徳的改革は、哲学・文学上の一大ルネッサンスとなった⁽²⁾。左右の立場を越えて、この時代の多くの知識人たちは、この改革に全面的にであれ部分的にであれ参加したのであった。こうして、クローチェは、当時のイタリアの思想や文化に絶大な影響力を及ぼし、霊の権威でもって精神界を支配したローマ教皇になぞらえて、「俗界の教皇」とさえ呼ばれたのである。彼は、一九世紀末から第二次大戦後の時代にかけて、イタリアで繰り広げられた数々の論争に関与し、いずれも重要な役割を果たしたのであった。

イタリアにおけるファシズムの出現は、クローチェに彼の思想の妥当

性を問う重大な出来事であった。それは、彼の自由主義思想に再検討を迫るものとなり、政治的・社会的状況に対峙して理論的再構築をはかることになった。のちに論ずるように、彼は、ファシズムの台頭から一九二四年まで、第一次大戦後の混乱を鎮め、秩序を回復するための力、そして、国民生活にふたたび活力を与える力として、ファシズムを条件付きで支持した。しかし、一九二五年に彼が起草した「反ファシスト知識人宣言」において、ファシズムと明確に絶縁し、独裁体制の強化に反対する立場をとるにいたった。そして、ファシズムが思想・言論・出版の自由を抑圧して、実質的に国内の反対者の声を制圧した一九一九年以降、彼はイタリアで唯一ファシズムに批判的な見解を発言することのできる人となった。クローチェは、ファシズムにその声を封殺された人々の希望の星であり、反ファシズムの旗手として仰がれた。とはいえ、彼が自由闘達にファシズムに対する反対の声を挙げることでできたわけではない。そこには、ファシズムの支配下で孤立した知識人たちの姿があった。しかし、ファシズム体制初期のクローチェの思想には、ある種の曖昧さがあったことは否めない。「一九二〇年代におけるクローチェの思想

の漸次的変化にあつては、行動が理論に先行したのか、あるいは底流となつていた哲学的立場の再構成が實際行動の面での活発な発言の道を準備していたのか、必ずしも確言しえない。⁽³⁾むしろ、それは思想ないし理論と行動の相互関係からいって、両方であつたと言わざるをえない。ある種の曖昧さは、どのようなものであつたのか、それはどのような思想的な関連をもつていたのであろうか。この問題は、これまでクローチェの歴史理論や政治思想の研究において、数多く論じられてきた。一方でクローチェの自由の精神がたえられ、他方でその限界が指摘された。⁽⁴⁾そこで、本稿は、一九二〇年代、ファシズムの台頭から独裁体制がほぼ確立される一九二九年までの期間におけるクローチェの態度を検討し、先の問題を考察しようとするものである。その際、この期間のイタリアの政治史とクローチェの思想全体の検討が必要となるが、紙幅の関係で差し当たって、クローチェのファシズムに対する発言と行動を跡付けていくなかで、上記の課題に取り組むことにする。

(1) この「精神哲学四部作」は、『表現の科学ならびに一般言語学としての美学』(*Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*. 1902)°、『純粹概念の科学としての論理学』(*Logica come scienza del concetto puro*. 1905)°、『実践の哲学—経済学と倫理学』(*Filosofia della pratica. Economia ed Etica*. 1908)°、『歴史敘述の理論と歴史』(*Teoria e storia della storiografia*. 1915)を指す。

(2) H.S. Hughes, *Coscienza e società*, tr da C. Costantini, 3^a ed., Torino, 1967, p. 68. 生松敬三・荒川幾男訳、『意識と社会』、みすず書房、一九七〇年、四四頁。クローチェが関与した多くの論争のうち、大きな政治

的論争として、マルクス主義の修正主義論争、第一次大戦への参戦論争、ファシズムに関する論争などを挙げる事ができる。

(3) H.S. Hughes, *ibid.*, p. 68. 生松・荒川訳、前掲書、六〇頁。

(4) これに関して、クローチェに限らずこの時代の思想家たちの行動とファシズムとの関係についてふれているものは数多くあるが、とりわけ参考になるものとしては、Cf. R. Colapietra, *Benedetto Croce e la politica italiana*, vol I e II, Bari, 1969. U. Benedetti, *Benedetto Croce e il fascismo*, Roma, 1967. 我が国では、羽仁五郎『クローチェ』一九七〇年。および北原敦『クローチェの政治思想(上)』『思想』五三五号—一九七〇年。『自由主義とファシズム』『思想』五五三号—一九七〇年。

一、自由主義

クローチェは一九一〇年一月、終身の上院議員に任命され、国政に参与することになった。しかし、彼の政治活動は限られた範囲に止まり、彼は研究と文筆活動に専心したのであった。この時期に、彼のおこなつた政治活動としては、一九一三年四月上院において、ローマ大学の歴史哲学講座に関する法案への反対演説をおこなつたこと、そして、一九一四年七月のナポリの地方選挙の際、自由主義派・穏健派・カトリックの三派連合の議長に就任し、選挙活動にかかわつたことが、挙げられるにすぎない。⁽¹⁾一九二〇年六月、ニッティ内閣の総辞職の後、ジョリッティを首班とする新内閣が組織されることになった。「新聞に予想される文部大臣として、私(クローチェ)の名前が挙げられていた。私はその声

を気にしなかった。なぜなら、ジョリッティとは面識がなかったし、政府や政治活動に入りたいとは思っていなかったから……。」ところが、数日後、入閣の要請があり、迷い悩んだあげく、妻の「もしこれがあなたが召命された義務であるなら、それを受け入れるべきでしょう」という勧めに従って、クローチェは文部大臣として入閣することになった。

第五次ジョリッティ内閣は、クローチェの他、カトリックのフィリップ・メーダが財務大臣に、元社会主義者のイヴァーノ・エ・ボノミーが国防大臣に、元サンディカリストのアルトゥーロ・ラブリオーラが労働大臣に、ファシストのカルロ・スフォルツァが外務大臣に就任するなど、きわめて異質な人々によって構成されていた。この内閣は、第一次大戦後の社会対立を左右の勢力を融合することによって緩和しようとするものであった。内閣の成立にあたって、ファシストの新聞『ポポロ・ディタリア』紙は、新文部大臣のプロフィールを「卓越した哲学者および天才的歴史家として国際的名声を得た思想と透徹の深遠な多くの書物の著者というだけでなく、学理の鼓舞者、創造者、使徒」と敬意を込めた賛辞でもって紹介した。

ジョリッティ政権は二年七月総辞職する。文部大臣在任中、ファシズム運動の高揚にもかかわらず、彼はなんらそれに対して意見を明らかにしていない。ファシストのローマ進軍の情報が流れるなか、二二年一〇月二四日、ナポリのサン・カルロ劇場でファシスト党の党大会が開催された。クローチェは、「イタリアで日に日にその圧力と重要性が増大する政党の直接的な知識をえることは有益だと考え、一種の義務感で出掛けていき、上院議員に割り当てられた席で」大会を傍聴して、直接ムッソリーニの演説を聞いた。六日後の一〇月三〇日、ムッソリーニ政権が

誕生する。

しかし、ファシズムに関して、彼は事の重大性に気づいていなかった。ファシズム政権成立後約一年を経過した一九二三年一〇月、『ジョルナーレ・ディタリア』紙のインタビューに、次のように答えている。

「哲学者や歴史家の目で見るとして、すべての国家は、ただ一つの国家である。すべての政府も、ただ一つの政府である。すなわち、政府とは、多数者を支配し統治する集団の政府である。すべての国家あるいは政府は、それらが存続するかぎり、有用性を、特に所与の状況のもとで可能な最大限の有用性を果たしているのである。その時々、この有用性がどのようなものであるかを識別することこそ、歴史家の仕事である。：政治形態は、理論家の抽象であるから、抽象的形態ではなく本質を見ようとする歴史家には興味がない。」現在の状況についていえば、「自由主義の問題やファシズムの問題があるのではなく、ただ政治勢力の問題があるだけである。現在の政府に対抗し代わりうる政治勢力が、どこに存在しているであろうか。私は、そのような勢力が存在しているとは思わない。むしろ、私は、あの一九二二年の議会の麻痺に逆戻りするといふ大きな危険を強調したい。こうした理由のため、思慮ある者は誰も、現状変更を望まないのである。」

また、「個人としては、自由主義の理念を受け入れられますか」という問いに対して、次のように述べている。

「私は、個人としては、自由主義者であるし、また自由主義者でしかありえない。しかし、それは、哲学的あるいは理論的な考察によって導きだされた立場というわけではない。そうではなく、私がナポリ人であり南部ブルジョアであると感じるのとまったく同じ感情で、自分を自由

主義者であると感ずるのである。私の知的・道徳的存在はすべて、リソルジメントの自由主義的な伝統から生じている。リソルジメント以後の自由主義的な統一イタリアのもとで育ち、その雰囲気なかで成長してきた人間のうち、自分自身を自由主義者でないと感ずるような人は一人もいないだろう。私は、理論的な議論によって、自由主義を擁護することとはしないけれども、私の現実の感情と意思においては自由主義者であることをはっきりと言いたい。⁽⁸⁾」

さらに、「あなたの自由主義の心情と、ファシズムの容認および正當化との間に矛盾はないでしょうか」という質問に、彼は次のようにファシズムを受け入れる姿勢を示したのである。

「何の矛盾もない。もし自由主義者が、イタリアを無秩序から救い出す力や能力をもたないのならば、みずから反省し、その欠陥を克服することが必要である。その間、いかなる側から生じたものであれ、他の勢力の長所を認め、それを受け入れて、将来に備えなければならぬ。

このことは、自由主義者の義務である。しかし、私は、自由主義者が『ファシスト』になるといふもう一つの義務をもつとは思わな⁽⁹⁾。」こうして、彼は政治的混乱を鎮め、秩序を回復しうる唯一の勢力と認めて支持することを表明した。また、ファシズムの容認が彼の自由主義の心情と矛盾しないとの認識を示した。そして、その自由主義の心情は、彼の哲学的な思想に基づくものではなく、リソルジメントの自由主義的な伝統から生ずるものであると論じたのであった。

(1) F. Nicolini, *Benedetto Croce*, Torino, 1962, p. 260.

(2) B. Croce, *Nuove pagine sparse*, vol. I, 2^a ed., (以下 *N.p.s.* と略

記す) Bari, 1966, pp. 63-64.

(3) M. Gallo, *Vita di Mussolini*, Bari, 1967, p. 151.

(4) C. De Prede, *Benedetto Croce. Il fascismo e la storia*, Napoli, 1983, p. 20.

(5) B. Croce, *N.p.s.*, p. 81. (一〇月二八日「ローマ進軍が開始された。」)

(6) B. Croce, *Pagine sparse*, vol. II, 2^a ed., (以下 *P.s.* と略記する) Bari, 1960, pp. 476-477.

(7) B. Croce, *ibid.*

(8) B. Croce, *ibid.*

(9) B. Croce, *ibid.*

二、ファシズムへの期待

一九二四年一月二五日、下院は解散し、4月に新しい選挙法による総選挙が実施されることになった。新しい選挙法は、全国の投票を合計して、最多得票数を獲得した政党に、全議席の三分の二が与えられ、残りの三分の一が比例配分によってその他の政党に与えられるというものであった。この選挙法が実施されれば、ファシスト党は絶対多数を獲得することが予想されていた。選挙法改正の意図もまたそこにあった。ファシスト党は、党員外の多くのひとを公認候補者名簿に登載し、選挙に勝利しようと懸命の努力を払っていた。オルランド、サランドラ、人民党前党员、大学教授、芸術家といった約百人の人が、ファシスト党候補とともに公認候補者名簿に名を連ねた。さらに、ファシスト側は、勝利

のためには暴力や不正も辞さない構えであった。事実、事あるたびに暴力事件が発生した。

このような状況について、一九二四年二月一日、クローチェはファシスト党機関紙『コッリエレ・イタリアーノ』紙のインタビューを受けて、彼の意見を述べた。

「表面でなく本質を見る人、部分でなく全体を見る人は、ただこの選挙法をおしてのみ、国民の合法的な代表者と国民を實際に支配する政党の間の二元的分裂の状態を克服できることに気がつくはずである。支配政党の活動をおして、新しい議会、新しい多数派が形成されれば、それらは再び合法性と立憲体制のもとで機能するようになることは明白である。」

さらに「あなたは、ファシズムが、新しい政治体制をつくりだすと考えますか」と問われて、「ファシズムが、自由主義とはまったく異なった政治体制をつくる可能性はあるだろう。しかし、現在のところ、そのような動きへの決定的な兆候は認められない。私が見いだすのは、選挙をおして、正常な政治生活へ、つまり立憲体制に復帰しようとする自発的な動きである。…ファシズムの心は、イタリアへの愛情であり、イタリアを救おうとする気持ちである。ファシズムの心は、権威のない国家は国家ではないという正しい信念である。この面において、ファシズムはその効果をもったし、現にもっているし、またこれからもつだろう」と答えた。この時点でも彼は、ムッソリーニが合憲的統治をするつもりであり、正常な政治生活に、つまり自由主義的な立憲体制に復帰する可能性を信じていたのであった。

総選挙の結果は、ファシスト党が四三〇万五九三六票の得票を得て、

一九二〇年代のクローチェとファシズム（中川）

総議席五三五のうち三七五の議席を獲得した。これに対して、野党側の得票数は、暴力と不正がまかり通った選挙であったにもかかわらず、約三〇〇万票までいった。総選挙後招集された議会では、選挙運動中にファシスト側がおこなった暴力事件や選挙での不正が、問題として取り上げられた。五月三〇日、下院では、総選挙の無効とそれに伴うファシスト議員の大量除名を求める決議案が、ラブリオーラ、マッテオッティ両議員から提出された。決議案の趣旨説明に演壇に上がった社会党議員のマッテオッティは、ファシスト議員達の怒号と野次の中で、毅然として総選挙が政府とファシストによる違法行為と暴圧の下でおこなわれたことを逐一明らかにし、激しい気迫をもって果敢にそれを糾弾した。彼の行動は、ムッソリーニ以下ファシスト達を憤激させた。

六月一日、マッテオッティが、自宅から歩いて下院に向かう途中、失踪するという事件が起こった。彼が暗殺され、それがファシストの手によるものであることが明らかになり、また、手下人たちとムッソリーニ自身との関係が暴露されるに及んで、ファシズム政権は非難攻勢を浴びることになった。議会では、六月一三日、野党議員の多数派は下院を引き揚げ、政府がいかなる措置をとるかを監視する権利を留保することにした。議会放棄に加わった社会党と人民党、および共和派や民主派の議員たちは、「アヴェンティノー派」と呼ばれた。それは、古代ローマの民衆が、貴族の専制に抗議して、アヴェンティノーの丘に立て籠った故事にならったものであった。下院は与党だけしか議場にいないという異常な事態になった。これは、ファシズムの命運にかかわる最初の重大な政治闘争となった。マッテオッティの暗殺とアヴェンティノー派の議会放棄は、クローチェをいたく当惑させた。分裂は自由にとって危険で

ある。なぜなら、ムッソリーニに行動の自由を与えるからである。それゆえ、彼は、ジョリッティと同様に、アヴェンティノ派の指導者アマンドラに対してすみやかに議会に復帰することを求めたのであった。

上院では、六月二四日、政府への信任投票がおこなわれた。投票の結果は、賛成二三五票、反対二一票、棄権六票で、圧倒的多数をもってファシズム政権は信任された。³⁾ この信任は、ファシズムが危機を脱する一つの突破口となるものであった。この信任投票において、クローチェは賛成票を投じた。このような時期に、彼は『ジョルナーレ・ディタリア』紙のインタビュアーを受け、総選挙とその後の事件の後でも、なおファシズム政権を支持する理由を次のように述べた。

「ファシズム運動は、新しい制度を生み出さないとだろし、その宣伝者が誇っているように新しい型の国家を創り出すこともできない。それゆえ、ファシズム運動は、自由主義体制がより安定した国家の枠の中で復興するためのかけ橋」である。³⁾ 「こうした理由により、いま必要なことは、ファシズムが変質をとげる過程のために時を与えることが必要である。そのために、私は上院で信任票を投じたのであり、それは熟慮した愛国的な票である。投票には、衝動的に投じられる票と、賛否についての長い熟慮ののち投じられる票とがある。すなわち、熱狂的な票と義務の票である。他の多くの上院議員たちと同様に、私の信任投票は義務の投票であった。」³⁾

このインタビュアーでは、次の五点が強調された。³⁾ まず第一に、ファシズムは自由主義国家以外の形態の国家を形成する能力がないことが明らかになった。第二に、この無能力さゆえ、暴力的方法で権力に留まらざるをえない。第三に、この方法がどこまで通用するか分らない。第四

に、恐るべき犯罪への怒りは、体制の急激な変化をもたらす。自由主義的行動に立ち返らねば、体制の解体になることもありうる。第五に、政府への信任投票は、やむえぬ義務の遂行であった。こうして、彼は、なお自由な体制への復帰が可能だと考え、自由主義体制が復興するためのかけ橋として、ファシズムへの支持を継続したのであった。

- (1) B. Croce, *P. s.*, pp. 479-482.
- (2) B. Croce, *ibid.*
- (3) M. Gallo, *op. cit.*, p. 151.
- (4) B. Croce, *P. s.*, pp. 482-486.
- (5) B. Croce, *ibid.*
- (6) F. Nicolini, *op. cit.*, p. 348-349.

三、反ファシズム

一九二五年一月三日、ムッソリーニは下院で演説し、現在の事態の道義的、歴史的な一切の責任を負うことを言明して、約半年間続いた政治的危機を打開するために反撃にでた。続く数カ月間に着々と国家のファシショ化が推し進められた。結社法による政党活動の封殺、出版の自由の抑圧、議会を放棄したアヴェンティノ派議員一二六名の議員資格剥奪、現政権を容認しない官吏の解雇、さらに公選制の市長の廃止と政府によるポデスタ（市長）の任命による地方自治の制限など、その後独裁体制への方向が固められていくことになる。

この時期にいたって、クローチェは、二五年三月「自由主義」という小論文を発表し、ファシズムが自由主義と明確に対立するものであるという認識をはじめて明らかにした。今日「自由主義の任務はいまや終わった。現在と未来は、二つの基本的な傾向、すなわち、一方で社会主義あるいは共産主義と、他方で『反動主義』あるいは『ファシズム』の間の闘争と対立に属するといわれている。社会主義と反動主義（もしくは国家主義あるいは『ファシズム』）は、ともに共通の敵として自由主義に向かってくる。」¹⁾

「社会主義と反動主義は、人間社会の永遠の要求を体现している」が、「より尊重すべき人間社会の要求、すなわち、個人や社会集団の自発的で創造的な力に可能なかぎり、自由の競争をさせることが必要だ」という要求は、自由主義の中に表現され、主張されている。なぜなら、これらの力によってのみ精神的、道德的および経済的向上が期待されるからである²⁾。この小論文ではじめて、自由主義とファシズムを対立するものとして捉える視点が打ち出された。しかし、それはいまだ精神の哲学に基づいた自由主義の理論によるものではなく、自由の宗教としての自由主義理論の構築のうちに彼の歴史理論の体系化のなかで試みられることになった。

クローチェは、同年五月反ファシズムの立場をさらに明確した。二五年三月、ファシズムを支持する知識人達は、「ファシスト知識人会議」を開催し、四月二一日 会議の総括をジェンティレの起草による「ファシスト知識人の宣言」としてまとめ、四月二一日に発表した。それは、全体主義国家と統帥に敬意を表したのち、ファシズムの宗教的性格を再確認し、ファシズムの歴史の理想像を描き出してそれをマツツイーニと

リソルジメントに結びつけた。さらに、リソルジメント後のイタリア国家の自由主義を外面的形式的な自由と批判し、ファシズムはイタリアに革新をもたらすと宣言した³⁾。この宣言に対して、アヴェンティノ派の指導者の一人であったアメンドラは、反対宣言の起草をクローチェに呼びかけ、クローチェの筆による「反ファシスト知識人宣言」が、数百人の署名をえて五月一日発表された⁴⁾。この「宣言」自体には、特別に新しい考えは表明されていないが、彼が反ファシズムの立場を明確に打ち出したものとして、またイタリアの全知識人がファシストに屈服したのではないことを示すものとして、記するに価する。

ファシスト側からの反撃は迅速であった。六月二二日、ローマのアウトグステオ劇場で催されたファシスト集会で、ムッソリーニは、「私は今から、諸君を驚かすような告白をしようと思う。実は、私はベネデット・クローチェのものを、これまで何一つ読んだことはない」と述べて、会場を沸かした⁵⁾。ムッソリーニのクローチェに対する評価は、少なくとも二四年までは、決して否定的のものではなかった。それはクローチェのファシズムに対する態度が曖昧であったということだけでなく、それまでのクローチェの知的活動にたいする尊敬の念によるものであった。ところが、マッテオッティ事件後、独裁体制を固め全体主義への傾向を顕にしたファシズムと自由主義とは両立しがたいものとなった。ファシズムとクローチェの関係もまた、「反ファシスト知識人宣言」の後、両者の対立は決定的なものとなった。それゆえ、ムッソリーニは、「クローチェがイタリアの大哲学者の一人だからといって、それが何なのだ。：口先だけで偉そうなことを言うだけの哀れなイタリア人の時代はもう終わったのだ⁶⁾」と罵倒したのであった。

さらに、一九二六年一月三十一日の夜、ファシストの二団がクローチェの家を襲撃するという事件が発生した。⁽⁷⁾クローチェ自身は難を逃れたものの、両者の間には癒すことのできない決定的な断絶が生じた。

クローチェは、上院で、いかなる形であれ自由を圧殺すると思われる法案に反対する少数の議員の中にいた。彼は、かつての自由党を代表するごく少数の集団の名において、二度政府案に反対して演説した。その一つは、フリーメーンソンの抑圧を意図した反結社法の審議においてであり、他の一つは、ヴァチカンと国家との和解を目的としたラテラーノ条約に関してであった。二五年一月二〇日フリーメーンソンの抑圧を意図した反結社法の審議において、クローチェは過去の反フリーメーンソン論にもかかわらず、反対を表明した。「私は自著⁽⁸⁾常にフリーメーンソンに反対してきた。なぜなら、彼らのイデオロギーは単純すぎかつ古臭いものであり、その浅薄さで堅固な歴史的・政治的文化を妨げてきたからである。∴私の反フリーメーンソン論は、自由を条件におこなわれ、いかなる種類の秘密結社も許容しがたいという自由の精神に動機づけられているのである。」「本法案は我々にとって前進であるが、∴反自由の法律全体の一構成部分と考えられる。」⁽⁹⁾こうして、彼は、自由な制度の破壊には、いかなるものであれ反対するという態度を示したのであった。

さらに、二九年五月二三日から二五日にかけて、上院ではラテラーノ条約に関する審議行われた。ラテラーノ条約は、統一国家が形成された一八七〇年以来イタリアが求めてきた懸案のローマ問題を解決するものとして、ムッソリーニの誇りうる業績であった。クローチェは、この条約自体にはなかったが、条約に含まれた政教協約を拒否して、反対演説をおこなった。政教協約は教会と国家の関係を定めたもので、その中

では、従来の政教分離の原則が放棄され、両権力の協力が謳われたこと、カトリック教義の教育が公教育の基礎とされたこと、および、教会法による婚姻の法的有効性を認めたことが、特に重要な点であった。彼は宗教国家の再生を危惧して反対を表明したのであった。⁽¹⁰⁾

(1) B. Croce, *Cultura e vita morale*, 3rd ed., Bari, 1955, p. 283.

(2) B. Croce, *ibid.*, pp. 284-285.

(3) E. R. Papa, *Fascismo e cultura*, Padova-Venezia, 1975, pp. 59-69.

(4) B. Croce, *P. s.*, pp. 487-491.

(5) B. Mussolini, *Opera omnia*, a cura di E. e D. Susmel, Firenze, 1955-72, vol. XXI I, p. 358. B. Croce, *N. p. s.*, p. 89. F. Nicolini, *op. cit.*, p. 354.

(6) F. Nicolini, *ibid.*, p. 354.

(7) I. De Feo, *Benedetto Croce e il suo mondo*, Roma, 1966, p. 106.

(8) B. Croce, *P. s.*, pp. 502-503.

(9) B. Croce, *ibid.*, pp. 504-509.

四、「歴史の忌避者」

一九二六年の夏、クローチェは、『イタリア史一八七一年〜一九一五年』⁽¹⁾(以下『イタリア史』と略記)の執筆にとりかかった。この本は、二八年一月六日に上梓され、同年から翌年にかけて版を重ねたのみなら

ず、英語版、ドイツ語版およびフランス語版が相次いで出版されるなど、洛陽の紙価を高らしめた。³⁾ 公刊に際して、クローチェは、体制側からの反動が不可避であること、出版禁止の命令が与えられることを予測していた。³⁾ しかし、ムッソリーニは出版を禁止する代わりに、諸新聞にこの本を、新生ファシスト・イタリアに不適合な貧しい精神で書かれたものであるとして、侮蔑するように指示した。実際に非難の嵐はすぐさま巻き起った。また、ムッソリーニ自身も、歴史に言及して本書を批判したことから、ファシズムと歴史とに関する論争が展開されることとなった。

ムッソリーニの批判は、リソルジメントの精神の正統な継承者であるファシズムの台頭およびファシズム政権の成立には筆が及んでいないことに対するものであった。クローチェは、『イタリア史』のなかで、イタリアの国家統一から第一次大戦前までの、すなわち、一八七一年から一九一五年までの歴史を、自由主義の発展のプロセスとして叙述した。そして、この発展の頂点に位置するのが、ジョリッティ時代であるとしたのであった。しかし、クローチェによって自由主義の発展の頂点に位置するされた時期の自由や社会進歩が、はたして彼が描いたような輝かしいものであったかどうかは検討を要する。いづれにせよ、彼にとつて、ファシズムは自由主義の発展の過程で生じる「自由の意識」の低下期の一時的な「モラルの病」であり、一つの「逸脱」であった。それゆえ、自由な体制への復帰によって、克服されるはずのものであり、自由主義の発展のプロセスの正統な継承者とは考えられなかったのである。このように、第一次大戦前に歴史家の叙述の対象を限定する問題は、幾度となく行われた同時代史を叙述することの可能性についての問題を想起させるが、クローチェは、一九一五年以後の出来事は政治の素材であつて、

歴史のそれではないと主張したのであった。この問題は、リソルジメント以後のイタリア史の中に、ファシズムをどのように位置付けるかということに係わっていた。リソルジメントとファシズムとの関係をめぐつて、のちに連続説、断絶説および露呈説などの学説が展開され、論争が行われることになった。

一九二九年五月二五日、ラテラーノ条約に関するクローチェの反対演説への答弁のなかで、ムッソリーニは、クローチェを名指しすることを避けながらも、彼を「歴史の忌避者」と批判した。³⁾ この「歴史の忌避者」という表現は、我々の興味を引くように思われる。「忌避者」という言葉は、大戦中前線の兵士達が、戦場で戦闘軍務を免除され、塹壕内での苦痛や攻撃による生命の危険を免れていた者に対する非難を表していた。この言葉は、当初は冗談交じりの皮肉で囁かれていたにしても、戦争が終結する一九一七年には、激しい侮蔑のニュアンスを伴つて「裏切り者」と同意語になった。とりわけ、生命を賭けて戦闘を担った下層階級出身者から、ブルジョアジーに向けて、単に戦闘を免れたブルジョアジーというだけでなく、戦争によって利益を得たと非難されたブルジョアジーに向けてられた言葉となつたのであった。戦時中安全な兵站部にいて戦いの勝利を篡奪する者への非難を意味していた。

クローチェに向けられた「歴史の忌避者」という非難は、あたかも彼が戦いを、すなわち歴史家として彼の専門領域での戦いを放棄したかのようになり、『イタリア史』の中で戦争に関する章に取り組むことを避けたように聞こえる。クローチェ自身は、その約一年後アメリカのジャーナリストのインタビューに答えるなかでこのことに言及した。「進行中の事柄は、考察や歴史的研究の素材ではないので、――なぜなら、すべては

それとして見られうるものではなく、その内部に我々が生き、我々の役割をその内部ではたし、それを完成させるために、他の人々と戦わなければならぬ事柄ではないから―私は叙述を一九一五年で止めた。そのため、いまイタリアを支配している人達は、私を皮肉っぽく『歴史の忌避者』と決めつけることを好んだのだ。』この言葉は、ファシズム体制崩壊後の一九四四年に解説されている。「共通の反論は、私が恣意的に一九一五年で止まったと⁷、すなわち、ムッソリーニは、「私が『イタリア史』を一九一五年で止めたので、私を『歴史の忌避者』と呼んだ。おそらく彼は、私が歴史を書いた時代のみならず、イタリア全史の総仕上げたるファシズムの輝かしい出現にまで筆を及ぼさなかったのを不当だとして、私を非難しようとした」のである。

しかし、ファシストの側からクローチェをとがめた「歴史忌避」は、博識家や文芸家は行動するより専ら座して観るのみだ、とする鋭い批判を込めた非難の言葉であった。ムッソリーニが演説の中で述べた言葉も、まったくこの意味で理解することができる。この意味では、ムッソリーニの非難が表明された時期には、『イタリア史』はまったく関係ない。したがって、クローチェの著作の中に第一次大戦に関する歴史書がないということも問題にはならない。ムッソリーニはクローチェを歴史家として非難した。そこには、歴史叙述の素材となる出来事を作り出す、すなわち、歴史を書く前に歴史をなすことができないで、歴史の客観性を主張する傲慢さへの行動家の怒りがあった。ムッソリーニは彼を「事件を作ること、言い換えれば筆をとる前に歴史をつくることができず、後になってからしばしば何の目的もなく、時として厚かましくもケチをつけることによって復讐する」輩の一人であると非難したのであった。そ

れは、歴史をつくることに無力なため、歴史を書くことしかなしえない、という選択を責める、歴史の素材となる出来事を作り出すことができないにもかかわらず、体制に批判的な目障りな歴史家に対する逆の復讐⁸であった。歴史を作りつつある人と安全な兵站部にいた人との間の対立は、クローチェの著作の対象である自由主義イタリアの政治に対する評価にもかかわらずいた。

ムッソリーニのいう歴史をつくることができないこと、換言すれば、彼の文芸愛好の表明、政治活動に乗り気でないこと、そして彼にとっての政治活動は研究であるとの表明は、この時期に繰り返し表されている。その一つの例を、二八年二月一五日のドイツの友人ヴォスラーの手紙への返信にみるができる。この書簡は、民主党がヴォスラーに帝国議会の議員の議席を提供しよう申し入れたことについて、教授としての仕事を犠牲にするほど政治活動に向いているとは感じないとして、辞退したいものである。クローチェの返信の中に、彼の政治活動への態度がよく表れている。「君が政治活動に入ることを辞退したというのは大変結構なことだ。我々の政治活動は、より広いそしてより基礎的な他の分野でなすべきだ。政治活動は、実践家たちが行うべきなのだ。私も短期間政治活動に関与することを余儀なくされた時、私本来の仕事から逸れているという感じを持った。だから、一種の軍隊への召集あるいは軍務としてのみ、職務を引き受け、耐えたものだ。」

彼は本来の仕事とされた文筆活動に多忙であったにもかかわらず、このような強制されたものという受け止めかたによってであれ、一度ならず公職を引き受け、政治活動に参加した。しかし、当時の彼の主張は責められるべき罪となるとさえ考えられ、ファシズムの崩壊後、そこに彼

の体制への抵抗の限界が表れていた。四五年、クローチェは文化と政治を分離する必要を半ば理論化した⁽¹⁾。ゆえに、彼の体制への抵抗は、次のように冷淡に評価せられたのであった。彼の独裁への「ノー」は多くの若者によって模範や忠告であったにせよ、常に静寂主義者の「ノー」であった。「%、自由として生命を危険にする人の、闘士のノーには、けこつなふなかつた。」⁽²⁾

- (1) B. Croce, *Storia d'Italia dal 1871 al 1915*, Bari, 1928.
- (2) B. Croce, *Epistolario*, II: Lettere ad Alessandro Casati, 1907-1952, Napoli, 1969, p. 98 e p. 114. Cfr. R. De Felice, *Mussolini il fascista*, II, p. 480.
- (3) Nicolini, *Il Croce minore*, Milano-Napoli, 1963, pp. 49-50.
- (4) Cf. R. De Felice, *Le interpretazioni del fascismo*, Bari, 1969, pp. 10-35. 藤沢道郎・本川誠二訳『ファシズム論』昭和四八年、三一九〇頁。
- (5) B. Mussolini, *Scritti e discorsi dal 1929 al 1931*, Milano, 1934, p. B. Croce, *N.p.s.*, p. 93. このムッソリーニの言葉は、反ファシズムの雰囲気の中で、反感を生み出し、逆にクローチェの演説に高い反響を呼び起こすことになった。演説のコピーがナポリの街に流布し、公安警察がその配布を禁止するために介入するほどになった。
- (6) B. Croce, *Epistolario*, I, Napoli, 1967, p. 161.
- (7) B. Croce, *N.p.s.*, p. 93.
- (8) B. Croce, *ibid.* また、彼は次のように述べている。「一九一五年以降の一〇年間の歴史を書くことは不可能であった。なぜなら、当時の私の任

務は、ファシスト体制の歴史を書くことではなく、それを嫌悪し、私の全知性と精神とでそれと対峙し、弱体化せしめることであつたから。」B. Croce, *Storiografia e idealità, morale*, Bari, 1950, p. 114.

- (9) C. De Frede, *op. cit.*, pp. 32-33.
- (10) *Carreggio Croce - Vossler, 1899-1949*, a cura di V. de Cap-rariis, Bari, 1951, pp. 308-309.
- (11) B. Croce, *Dell'arte delle riviste e delle riviste letterarie e odierne*, in *Quaderni della «Critica»*, I, 1945, n. 1, pp. 111-112.
- (12) G. Salvemini, *La politica di Benedetto Croce*, in «Il Ponte», X, n. 11, nov. 1954, pp. 1741-1742.

おわりに

これまで論じてきたところから明らかなように、クローチェのファシズムに対する態度は、一九二五年を境に条件付の支持から反対へと変わっていく。一九二五年以前のクローチェは、ファシズムを第一次大戦後の社会的混乱を収め、政治的秩序を回復させる唯一の政治勢力として、期待したのであった。ファシズムは、自由主義的体制へ復帰するための過渡期の現象として捉えられたのである。ファシズムによって、自由さらには自由主義が危機に晒されるとはけつして考えられなかった。それゆえ、ファシズムに対して好意的であるとさえ思われる発言が繰り返された。しかし、それは彼の哲学的な自由主義の理論に基づいたものではなく、リソルジメントの伝統のなかで育まれた経験的・感情的な面

での自由主義の理解によるものであった。この点で、彼は自由主義の精緻な理論の構築ができていないままに、安易な楽観主義と政治的先見性の欠如を暴露したと批判されざるをえないであろう。

一九二五年以後ファシズムが独裁体制を強化するにおよんで、彼は反ファシズムの立場に移行した。マッテオッティ事件後、独裁体制を固め全体主義への傾向を顕にしたファシズムと自由主義とは両立しがたいものとなった。そこでようやく自由主義とファシズムを対立するものとして捉える視点が打ち出された。しかし、それはいまだ精神の哲学に基づいた自由主義の理論によるものではなく、自由の宗教としての自由主義理論の構築は彼の歴史理論の体系化のなかで試みられることになった。各種の自由が抑圧され、体制への忠誠を拒否した人々への甘言、脅迫、公然たる暴力が日常化していくなかで、クローチェも新聞を通じての侮辱や脅迫、警察による監視、書物の出版や雑誌の発行の妨害などを受けることになった。ファシストたちのねらいは彼の名誉を傷つけることあり、二六年の家宅襲撃事件を除いて、公然たる暴力は控えられた。彼はイタリアに自由が消滅していない証しとして、体制への批判の声を挙げ、そのことを許された人物であった。

クローチェは、『イタリア史』のなかで、イタリアの国家統一から第一次大戦前までの歴史を、自由主義の発展の過程として叙述した。そして、この発展の頂点にジョリッティ時代を置いた。しかし、クローチェによって検証された時期の自由や社会進歩は、彼が描いたような輝かしいものであったかは疑わしい。『イタリア史』の叙述は一九一五年で終わり、ファシズムの台頭およびファシズム政権の成立にまで筆は及んでいない。彼にとって、ファシズムはあくまで一時的な「モラルの病」で

あり、「自由の意識」の低下期に照応する一つの「逸脱」であった。それゆえ、自由な体制への復帰によって、克服されるはずのものであった。しかし、ファシズムの崩壊によって「モラルの病」が癒えて自由な体制が回復し、彼が反ファシズムの旗手としてふたたび国民の前に現れたとき、もはやファシズム前の「輝かしい自由主義」の体制ではなかった。彼は保守的な立場を代表する人物として登場した。第二次対戦後のクローチェについては、別の機会に論じることとしたい。

（島根大学教育学部社会科研究室）